

聖書:第一列王記21章15~29節

説教:へりくだる者

はじめに

先ほど私たちは、「私たちの負い目をお赦し下さい。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」と祈りました。「赦します」と言ったのはよいのですが、自分にとって負い目のある人たちを本当に赦しているのでしょうか。この祈りだけは声を出して祈れないと正直に言う方もおられます。声には出して祈っても、こころが刺されて平安のない方もおられます。それほど人を赦すという事は難しい。神はどうなのでしょう。

前は、ナボテという人が所有していたぶどう畑を巡って起きたある事件のことを見てきました。アハブはそのぶどう畑が欲しくなり、当時としては破格の条件を提示して売ってくれるよう交渉するのですが、ナボテは「先祖のゆずりの地を売ることなど主にかけてもあり得ない」と言って強く断る。これを聞いたアハブの妻イゼベルは、ナボテは神と王を呪ったという罪で告発し、偽りの証言者を立たせて、石打にして殺してしまいます。

今日はその続きです。神は預言者エリヤをアハブの所に遣わし、さばきのことばを語らせています。確かに神は罪を見過しにはなりませんそれは納得できる。しかし、29節はどうでしょうか。アハブが粗布をまとって悲しむ姿を見せた途端に、すぐ直前まで厳しいことばを語っていた神であったのに、あっさりときさばきを取り下げて罪を赦していきます。読んでいるこちらの気持ちがついて行かないほどです。これはどういうことか。見てまいります。

1 イゼベルが見ているもの：ナボテは生きていない

アハブについては、25節で「アハブのように、自らを裏切って主の目に悪であることを行った者は、だれもいなかった」と言われています。そのようにならな生き方をするようになったのは、異教の神バアルを拝むイゼベルを妻としたことがきっかけであることは間違いありません。そんなイゼベルとはどのような人物であったか。15節のことばに注目して考えます。「イゼベルはナボテが石打ちにされて殺されたことを聞くとすぐ、アハブに言った。『起きて、イズレエル人ナボテが代金と引き替えて譲ることを拒んだ、あのぶどう畑を取り上

げなさい。もうナボテは生きていません。死んだのです。』」

ナボテは死んだし、その上彼が持っていた土地を相続する者はだれもない。だから自分たちが横取りしてかまわない。これがイゼベルの論法です。ひどいことを語っているのですが、「ナボテは生きていない。死んだ。」そのところ間違いはない。正しいことを語っているように見える。でも、これはイゼベルが語ったことばです。神の律法をないがしろにし、自分の欲望を満たすためなら人を殺してもかまわない。そう考えている人の目で見た世界と言ってもよい。イゼベルのこの見方は正しいのか、間違っているのか。そのことを私たちに問いかけるために、わざわざ聖書に記されているのではないかとさえ思うのです。結論から言えば、イゼベルは間違っています。いったいどこが間違っているのか。では何が正しいことなのか。そのことはまた最後のところで触れてまいります。

2 エリヤが告げたまさばきのことば

1) わざわいをもたらす

ナボテが死んだと聞いたアハブは、ぶどう畑を手に入れるために喜び勇んで出かけました。ちょうどそこへ預言者エリヤが遣わされ、こう告げます。21節から24節。「『今わたしは、あなたにわざわいをもたらす。わたしはあなたの子孫を除き去り、イスラエルの中の、アハブに属する小童から奴隷や自由の者に至るまで絶ち滅ぼし、あなたの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バアシャの家のようにする。それは、あなたが引き起こしたわたしの怒りのゆえであり、あなたがイスラエルに罪を犯させたためだ。』また、イゼベルについても主はこう言われる。『犬がイズレエルの領地でイゼベルを食らう。アハブに属する者で、町で死ぬ者は犬がこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう。』」

2) 荒布をまとうアハブ

神がアハブとイゼベルの罪をさばこうとしておられます。それは当然であると私たちは納得します。しかし次の27節に進んだとき、予想もしていなかった展開になっていきます。「アハブはこれらのことばを聞くとすぐ、自分の外套を裂き、身に粗布をまとって断食をした。彼は粗布をまとって伏し、打ちひしがれて歩いた。」

アハブが自分の罪を悔いていく姿を見て、私たちは戸惑いを覚えます。なぜか。理由が二つある。

その一つ目。25、26節で、いかにアハブが歴代の王の中でも一際ひどいことをしてきたのかが強調され、26節の最後では「非常に忌まわしいことを行った」とあるのです。ところがすぐ次の節では、アハブが悔い改める。26節と27節のあまりの違いに戸惑いを覚えます。

次に二つ目。アハブのもとに預言者が遣わされたのはこれが初めてではありません。エリヤもそのひとりでしたが、他の預言者たちも繰り返しアハブの所へ遣わされ、罪を悔い改めるように語ってきました。けれども彼はまったく聞く耳を持たず、むしろますますひどいことをしていった。そんな人がどうして今突然に、エリヤが語るさばきのことばを聞いて急に悟ったように荒布をまとい断食をするのだろうか。神のさばきが恐ろしくなったと言うことかもしれません。でも、なぜこのときなのか。そういう戸惑いです。詳しいことはわかりません。でも神は、必ずアハブが悔い改めると知って、じっと忍耐しながら待っておられたと言うことができます。

3) 忍耐する神

いったいどれほどの間、待ったのでしょうか。振り返れば、アハブが王となったことが記されているのが16章で、21章になってもまだアハブに関する記事が続く。記事の長さから言えば、他の王と比べ別格の扱いです。信仰者ダビデであればそれもわかる。ところがそうではない。むしろひどい王さまで。どうしてそんな王さまのことがこんなに多く聖書に書かれるのか。もう一つ疑問なのは、そんなひどい王さまのところへ、なぜ神は預言者を繰り返し遣わしたのか。非常に忌まわしいことを行う王であるなら、さっさと見切りをつけられよいのではないか。私たちはこんなふうにすぐに結論を出したくなる。

アハブのことだけではありません。例えば、ひどい事件を起こした犯人がテレビに映ったりすると、「こんな男は絶対に死刑だ」と言うことがあります。あるいは、福音を伝えても反応が鈍かったりすると、「あの人は救われない」と言ってこれもまたすぐに結論を出して、がっかりすることもある。ところが神は実に気が長い。すぐに結論を出さず忍耐しながらアハブに関わり続けていく。そのことがアハブの記事の長さにも反映されています。

3 神

1) さばきを思い直す

そもそもアハブは、どのような罪によって神のさばきを受けなければならなかったのか。神ご自身が二つ理由を挙げて語っています。

一つ目は、20節後半にあるように「主の目に悪であることを行うことに身を任せた」という理由です。妻イゼベルが拝んでいたバアルの神々を拝み、バアル神殿を建て、バアルの預言者を育成し、反対に主の預言者を虐殺してしまう。そういう罪を言っています。

そして二つ目。21節最後に「あなたがイスラエルに罪を犯させたためだ」とある。具体例を挙げれば、バアルの神を拝むようにと国民に強制したこともそうですし、イゼベルの策略ではあったのですが、ナボテの土地を横取りするために、イズレエルの住民に手紙を書き、偽証させ、無実のナボテを死罪とさせ、石打にするよう命令した。このようにして彼は民たちにも罪を犯すよう率先して指導した。アハブはこのように多くの罪を重ねて神を裏切っていた。

ところが神は、悔いるアハブをご覧になり、こう語ります。29節。「あなたは、アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているので、彼の生きている間はわがわいを下さない。しかし、彼の子の時代に、彼の家にわがわいを下す。」

さきほどまでエリヤの口を通して強い調子でさばきのことばを語っていたのに、いとも簡単にさばきを思い直し、アハブの罪を赦す。

多くの方は疑問に思うのでしょうか。アハブは、自分の罪の償いをするためにもっと苦しむべきではないのか。というのは、アハブのことからどうしても自分にひどいことをした人のことを思い出してしまうのです。自分の人生をめっちゃめちゃにしたあの人のことを絶対に赦せない。あの人はもっと苦しまなければならない。そういう思いと結びつく。だからこんなに簡単に赦してしまう神のことが不公平だとしか思えません。

2) へりくだる者を赦す神

先ほど私たちは主の祈りの中で「私たちの負い目をお赦し下さい」とまず先に祈りました。この順番はよく考えられています。あの人のことは絶対に赦せないという思いを抱えている私たちなのですが、主の祈りを祈るとき、まず神に赦していただかなければならない罪人であったことを思い起こすように、そんな順番になっています。神がアハブの罪を簡単に赦すのを見てなんと不公平だろう

と憤る前に、まず自分自身の罪のことを振り返る
ようにと主は言われます。

ではそんな私たちは、いつ赦されたのでしょ
う。アハブのようにずっと長い間、神に逆らい続け
てきたと言ってよい。それなのに、神が忍耐してく
ださったので私たちは救われました。

私たちはどのようにして赦されたのでしょうか。な
にか良いことをしたからですか。とんでもない。ア
ハブと同じようなことをしてきた。

それとも、私たちが一生懸命罪の償いをしたか
らですか。いいえ。アハブはなにをしたか。エリヤ
から神のさばきを聞いて、すぐに粗布を身にまと
い断食し、頭を垂れながら打ちひしがれて歩い
た。ただそれだけです。それをご覧になった神は、
「彼がわたしの前にへりくだっているで、彼の生き
ている間にわがわいを下さない」と語ってくださっ
たのでした。私たちも、ただ主の十字架の前で私
は罪を犯しましたと告白しただけ。神はそんな私
たちをご覧になり、「わたしの前にへりくだってい
る」者と呼んで、わがわいを思い直してくださっ
た。これが私たちに与えられている神の救いの方法
です。

不公平でしょうか。でも、もし神が不公平とも
思えるような赦しを与えてくださらなかったなら、
だれひとり神の前に立つことができなかったので
す。

3) イゼベルに見えなかったもの

最後にイゼベルの見方のどこが間違っていたの
か。そのことに触れたいと思います。自分のしてきた
ことを悔いたアハブの罪は赦されました。では殺
されたナボテはどうなるのでしょうか。殺された主
の預言者たちはどうなるのでしょうか。死んでし
まった者は取り返しがつかない。あきらめよ、と
いうことか。もし神のさばきがその程度のもので
あったら、信じる意味はありません。罪が赦され
るということはどういう意味か。さばかれない、
という消極的な意味だけではない。ナボテを殺し
たアハブの罪、その罪が赦されたのですから、すべ
てが完全に回復される。そう言っている。という
ことは、ナボテは死んだのではない。やがてよみ
がえります。イゼベルは言いました。「死んだから
ナボテの土地を取り上げてよい。」とんでもあり
ません。主のゆずりの地は誰も取り上げること
ができないのです。私たちの地上のいのちはいつた
んは閉じられるたとしても、何も手遅れではない。
必ず約束の地を相続する。イゼベルにはそれが見え
なかった。

私たちが主イエス・キリストをとおして与えられ
ている罪の赦しとは、それほど奥深いものであっ
た。主の恵みに感謝します。